

『想像力のスイッチを入れよう』

下村 健一

想像力の「スイッチ」の必要性

一つ目の事例（マラソン大会の例）

読者が情報の発信者の場合①②③

- ① 学校のマラソン大会で、十位に入った。前回：五位だとすると、こう言うだろう。「前回より、五位も下がってしまった。」
- ② しかし、先生はこう言うかもしれない。「三十秒もタイムがちぢまっていますよ。」
- ③ 同じ出来事でも、何を大事と思うかによって、発信する内容がずいぶんちがってくる。



読者が情報の発信者の場合

- ④ 学校や家庭での会話だけで起こることではない。

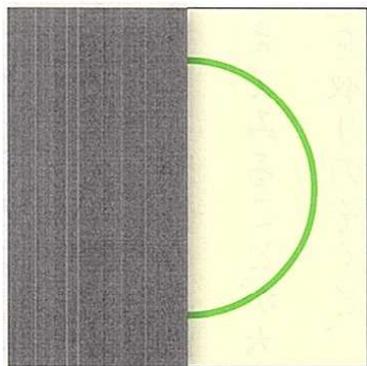
「メディア」：テレビやインターネット、新聞など、情報を得る手段のこと。



メディアから発信される情報もまた、事実の全ての面を伝えることはできない。大事だと思う側面を切り取って、情報を伝えている。

二つ目の事例（図形の例）

- ⑤ 図①は、図形の右半分が見えている。
「円の右半分だな。」

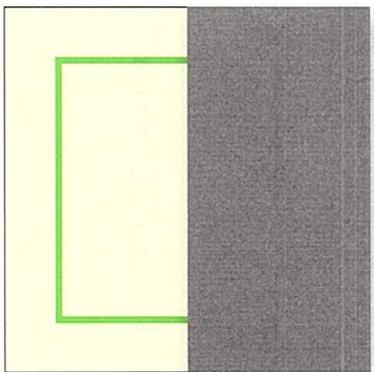


図①

いっぽう、

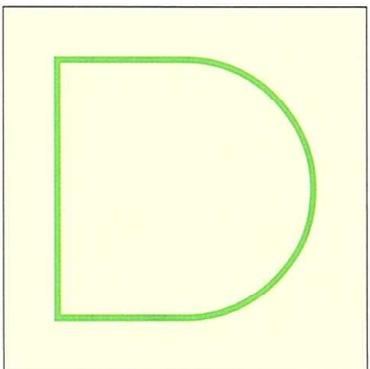
図②には、左半分が見えている。

今度は、「四角形の左半分だな。」



図②

しかし、どちらの全体図も同じ図③の形だろすると、
図①や図②から推測した「円」や「四角形」は、切り取られた情報だけから全体を判断したことによる
思いこみということになる。



図③

- ⑥ このような思いこみを減らすため、わたしたちは、
あたえられた情報を事実の全てだと受け止めるので
はなく、頭の中で「想像力のスイッチ」を入れてみ
ることが大切なのである。

想像力の「スイッチ」を入れるときに
大切なこと

⑦ 三つ目の事例（報道の例）

⑦ 具体的に考えてみよう。



サッカーの人気チームで監督が辞任することになり、Aさんが新しい監督になるのではないかと注目が集まっている。

⑧ まず大切なのは、メディアの情報について冷静に見なすことである。

この報道の中で、

「Aさんは、報道陣をさけるためか、うら口からにげるように出ていきました。」

・ Aさんが何かをかくしているように思う。

しかし、うら口から出だしたのは、その方向に行く必要があったからかもしれない。

こう想像してみると、「報道陣をさけるためか」というのは、レポーターがいただいた印象にすぎない可能性がある。

また、急がなければならぬ理由があったのかもしれないから、「にげるように」も印象。

このように、想像力を働かせながら、一つ一つの言葉について、『事実かな、印象かな。』と考えることが大切。

印象が混じっている可能性のある表現を取りのぞくと、結局、確かな事実として残るのは、

「Aさんは／うら口から／出ていきました」

Aさんが次の監督になると判断する材料は何もない。

⑨ ⑩ 「Aさんは、来月から予定していた外国での仕事を、最近、キャンセルした。」

この表現には、印象は混じっていない。
だが、ここで、『他の見方もないかな。』と想像してみよう。その仕事は、相手側の都合で、急にキャンセルせざるをえなかったのかもしれない。

⑪ 次に大切なのは、メディアが伝えたことについて冷静に見直すだけでなく、伝えていないことについても想像力を働かせることである。メディアは、ある出来事の特定の部分にスポットライトを当てて、わたしたちに情報を伝えている。明るいスポットライトの周囲には、必ず、見えない暗がりができる。その暗がりには、『何かかかっているかない。』と想像することも大切だ。

⑫ 最後に、いちばん大切なのは、結論を急がないことである。世の中の出来事には、さまざまな見方がある。新しい情報を聞けば聞くほど、想像力のスイッチが入れば入るほど、だんだんと多くのことが見えてきて、少しずつ事実の形が分かっていく。まずは一度落ち着いて、『まだ分からないよね。』いと考えることが大切。

⑬ ⑭ 思いこみや推測によってだれかを苦しめたり、だれかが不利益を受けたりすることは、実際に起こりうるのだ。



筆者の主張

⑮ 思いこみを防ぐために、メディアの側も、情報を受け取るあなたの側も、それぞれに努力が必要なのである。

⑯ あなたの努力は、「想像力のスイッチ」を入れることだ。あたえられた小さいまどから小さい景色をながめるのでなく、自分の想像力でかべを破く大きな景色をながめて判断できる人間になってほしい。

